

日程	平成30年7月25日(水)～26日(木)	
視察先・視察内容	埼玉県春日部市	かすかべ未来研究所について
	静岡県浜松市	ユニバーサル農業について

①埼玉県春日部市 かすかべ未来研究所について

春日部市 人口233,897人 人口増加率▲1.04%  
 (年少11.43% 生産年齢60.01% 老年27.89%)  
 高齢夫婦世帯 13,200世帯  
 高齢単身世帯 9,596世帯  
 一世帯あたり人員 2.30人



かすかべ未来研究所（庁内シンクタンク）設置の目的

市を取り巻く環境として、市民ニーズの多様化・高度化、厳しい財政状況、地方分権の進展があり、政策推進の迅速性、政策推進の経済性、政策形成力の向上が市民福祉向上のために必要である。着実に適格な政策を実践するため庁内シンクタンクを設置することになる。

設置の経緯として、春日部市議会議員からの一般質問や市長のマニフェストの影響もあり、また地方分権の進展による地方自治体のそれぞれの地域住民ニーズを把握し、効果的かつ効率的に取り組んでいくことが最重要とされている。

かすかべ未来研究所の機能

①調査研究機能

様々な行政課題を解決するために、データ収集・分析をもとに調査研究する機能。

研究テーマ

平成22年度	定住人口の増加策 エコまちづくりの推進	提案型アウトソーシングの導入
平成23年度	大災害が発生した場合の職員の対応 春日部市の教育力のアピールの必要性とその方策	
平成24年度	行政経営の柱である行政評価制度の検証と行政最適化 人口増加策の必要性と具体策	広報戦略
平成25年度	公共施設の適正配置	食育の研究
平成26年度	地域別人口動態	人と組織を育てる市役所
平成27年度	総合戦略策定の事業提案と効果測定	協働まちづくり手法
平成28年度	歳入確保策と債権管理の最適化 活用	統計データの有効管理・活用
平成29年度	子育て環境	地域資源活用と産業創生

各研究テーマすべて、春日部市にふさわしい内容となるべく、調査研究する。このうち10項目が、すでに施策へ反映されている。

## ②人材開発機能

制作形成能力向上のため、研修として基礎講座や外部有識者講演会に参加し、行政課題の解決策を検討する実践的な研修を通して、必要な技能を修得する。また職員のプレゼンテーション能力向上のため、大学での講義も行う。

## ③支援機能

各担当部署が行う計画策定や政策立案に対する助言・相談、研究成果の情報発信等を行う。

また大学や企業との連携として「包括的連携協定推進事業」があり、様々なテーマを設け調査・分析・研究を行う。

## 所感

かすかべ未来研究所の設置は、議会も好意的で期待しているという。

設置の際に議会での一般質問と市長のマニフェスト内での「民間キャリアを生かして姿勢を手助けしていただくシンクタンクを構築」と掲げられた事が設置のきっかけになっているとはいえ、議員は市民の声を聞き市政に届ける事が大きな仕事と考えていた私にとっては衝撃的な事実であった。庁内シンクタンクが住民ニーズを的確に把握し、研究成果やデータの蓄積をすることで、議員は政策の方向性すら携わることができない可能性がある。

かすかべ未来研究所に関しては、研究テーマによって公募研究員がなかなか集まらない、職員の通常業務と研究の両立の難しさなど課題があげられたが、展望は明るいと感じる。研究データの蓄積が、今後有効な財産になることは間違いない。本市においては委託での計画書等の作成を行っているが、庁内シンクタンクがあれば、いくつかの計画は庁内で作成可能となる。

「住民ニーズを的確に把握し、地域の政策課題を効果的かつ効率的に取り組んでいく」事が求められることは、古今東西、行政の役割とされる。政策の最適化を行うために、庁内シンクタンクという研究所を設置することは先進事例といえる。

研究所であるが故、研究はするが形にならないテーマも数多く存在する。市役所は大学ではないので、行政に反映できないテーマに税金を投入し研究を続けるのは、少し違和感を感じる。民間や議員がやるべき仕事を行政が積極的にやっているようにもみえる。

大切なことは、市民目線で市民の満足が得られるような施策を取り組むことであり、今視察において、かすかべ未来研究所の設置により、行政と学生・企業、市民が連携し、市民満足度の高い市政運営がなされていくと期待できた。



京丸園株式会社

静岡県浜松市南区鶴見町380-1

従業員 役員4名 社員10名 パート75名  
(障害者24名) + 派遣障がい者11名

平均年齢 44.5才

障害者割合 35%

男女比 5:5

経営理念 「笑顔創造」

特徴 ユニバーサル農園



### (1)浜松市の農業政策とユニバーサル農業

- ・浜松市の農業の担い手の育成・確保のための一つの施策に、ユニバーサル農業の推進をかけた、多様な担い手の育成に取り組んでいる。福祉施策ではなく、あくまでも農業施策であることがポイントである。ユニバーサル農業とは、農業や園芸作業を行う事に生きがいづくりや、高齢者・障がい者の社会参画などの効用を、農業経営の改善や多様な担い手の育成などに活かしていこうという取り組みである。

伝統的な農作業では農業者が障がい者を雇用することは難しく、農業体験程度で終わってしまう。種まきから収穫までの行程を作業分解する視点をもつことで福祉の視点が持てるようになったのが特徴である。

### (2)浜松市の取り組みと関係者との関わり

- ・「浜松ユニバーサル農業研究会」は農業者、福祉関係者、学識経験者、県・市の関係各課で構成されている。定例会や視察調査、イベントへの出展を通じ、情報の共有化や連携の促進をはかる。福祉施設とのマッチングや受入マニュアルの作成、啓発や広報を浜松市が行っている。



### (3)京丸園ユニバーサル農業のつながり

- ・特例子会社を含めた作業委託を活性化するには仕事を分割できるような農業コンサルタントの育成も必要となる。農業と福祉と企業の連携による福祉就労ではなく一つの農業ビジネスとして成立している。福祉政策ではなく、農業政策であることから農業を中心にしたつながりが形成されている。浜松市においても、担当部局は産業部農水産課の管轄となっている。(福祉関連部局ではない) 農業と福祉がよい関係を保つ理想的な「農福連携」である。



#### (4)京丸園 ユニバーサル農園ハウス 現地視察

##### ミニチンゲンサイ ハウス



定植作業はパネルに水平に素早く作業しなければならず、健常者でも特に器用な人が行う作業だが、写真のような器材の開発により、障がい者作業効率が健常者を超える事ができた。



##### 所感

京丸園は障がい者とともに働くことで、既存の農業の弱点を認識し、試行錯誤を繰り返し、5年間で黒字化に成功させた。企業が変わり続ける仕組みを理解したという。

福祉就労のように面倒をみてもらう事ではなく、働き場に身を置くことが障がい者にとって重要と再確認した。京丸園では80代1名をはじめ、70代9名、60代5名、50代10名、40代19名、30代12名、20代15名、10代3名の従業員がいる。男女比も5：5、障がい者は各年代にいる。多様な人がいる職場のなかの雰囲気は明るいと聞いた。障がい者を受け入れてから、様々なコミュニケーションも生まれた。

先にも述べたが、農業は種まきから収穫までできて一人前。職人にならないと言われていた。そこに福祉の視点が入り、作業を分解することで障がい者1人1人のできる作業ができ、障がい者が作業効率を上げるための必要な機械化が進んだ。

分業制や機械化を取り入れたことで生産性が向上し、生産から出荷までの回転は2倍近く上昇するなど、着実に収益拡大に繋がっている。

視察時にハウス内でのミスト装置が運転されており、これも作業環境と野菜生産には必要な機械化であり、誰もが快適に働ける環境の整備である。

現在、障がい者チームが中心になってミニチンゲンサイを生産し、黒字化している。

障がい者はそれぞれの障がいを持ち、望む働き方も違う。分業することで個々にあった仕事を作り出し、その過程で工夫や変化がおき、より働きやすい環境ができる。

農業は、やり方や仕組みを変えていけば、発展の余地はまだあると考える。

農業が福祉とつながることで、障がい者や高齢者などあらゆる人材の多様性を経営に戦略的に取り入れることで、あらたな強い農業のビジネスモデルができあがる。

岡崎市においても今事例をもとに、現在の農業生産者と意見交換をしていくことを要望していきたい。